

れる金鳥居は、(たとえ再建されていなくとも)上吉田村の街並みを描くにあたって無くてはならないものとして書き加えられた、と考えられます。当然、問屋場本の絵図中の金鳥居にも、同じことがいえます。

ただ、問屋場本の絵図をよく見てみますと、街の中央を流れて下っている水路が、金鳥居の直前で(富士山に向けて)右に曲がり、鳥居の真下ではなく台石を避けるように外側を流れている様子が描かれています。その理由はよくわかりませんが、鳥居が上吉田の街の入口を示すシンボルとして、また、富士山そのものを御神体とする心意を持つ人々にとって、敬意をもって扱われたためではないでしょうか。これは金鳥居のもとで、道者たちが富士山に向かって座って拝礼し、拝みをあげるのにも、川が鳥居の真下を流れていない方がいいのです。天保14年(1843)の『富士の道の記』でも、「此鳥居の前にひざおりて、鈴ふりならし御歌を上る同者(道者)あり」と記されています(『MARUBI 36』

2011所収)。このため、この金鳥居の部分はかなり信憑性があり、实景に基づいて描かれたものと思われる。鳥居と川的位置関係は、『富士山明細図』(天保11年(1840)~弘化3年(1846))や『富士山真景之図』(嘉永元年[1848]でも確認できます。)とすると、この絵図は、『甲斐国志』の村絵図以降、鳥居が実際に建てられていた天保2年(1831)より後の作成である可能性が高い、ということになります。

一方、富士登山の紀行文などを見ますと、享和元年(1801)から文化9年(1812)までのものには金鳥居の記述はありませんが、文政6年(1823)の芙蓉亭蟻乗『富士日記』には「入口に唐銅の大鳥居有」とあって、天保2年(1831)の10年ほど前ですが、金鳥居の再建をうかがわせる記述があります。

筆者は、かつて御師外川家の屋敷普請帳である「家作萬覚帳」を拝見した時、明和3年(1766)に始まった家作りが、ようやく安永6年(1777)に御神前の畳を入れて終了するのを目にして、江

戸時代の史料は、決して現代のせっかちな自分と重ねて読むはいけなことを教えられました。鳥居と家作りとはまた違うと思いますが、中雁丸家は代々の悲願を寺社奉行所に繰り返し出願する一方、有志の人々とともに着々と現地で金鳥居再建の作業を進めていたことも考えられます。それがようやく落成を迎えるのが天保2年だとすると、それ以前でも鳥居の形はある程度できていたのかもしれませんが。

このような観点から史料を読み返してみますと、天保2年の文書には、(文化12年[1815]に寺社奉行から再建の許可をいただきましたが)、「是迄年来丹精仕、少々宛之他力ヲ以テ再建いたし候義ニ付、段々延引ニ相成、漸々此節皆出来仕」とあります。文化12年以降、少しずつの他力〔他人の援助〕で再建の作業を行ってきたので完成が延引した、と読めます。あの大きな金鳥居は、やはり何年もかかって再建されたようです。その途中の状態を見た富士参詣の人々や絵師が、金鳥居に言及し

発見! 上吉田村絵図

たりその姿を描いても不思議ではありません。文化12年以降寺社奉行の許可を得て再建作業を始めた、という点も、今のところ紀行文の記載とも矛盾していないのです。

上吉田村絵図の年代をきめるのは、なかなか一筋縄ではゆきません。これ以外にも、(金鳥居が建っていた寛政12年以前の)古い上吉田村の絵図をもとに2枚の村絵図が作成された場合など、いくつかの可能性が考えられますが、この点については、今後上吉田村やその周辺の史料を読み込んで、勉強したいと思っています。

荊沢の上吉田村絵図〔問屋場本〕は、実は5年前に時田 恵先生のご紹介で問屋場展に伺った際拝見したものでした。その時お約束した村絵図の整理を、漸く本年になって完成することができました。再度調査の御許しをいただいた問屋場の方々感謝するとともに、御報告の遅れた関係の皆様にお詫び申し上げる次第です。

富士吉田市歴史民俗博物館 FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

ご案内

開館時間 / 午前9:30~午後5:00(午後4:30迄入館可)

休館日 / 火曜日(祝日を除く)、
祝日の翌日(日曜・祝日を除く)、年末年始

観覧料 / 大人 300円(団体240円)
小中高生 150円(団体120円)

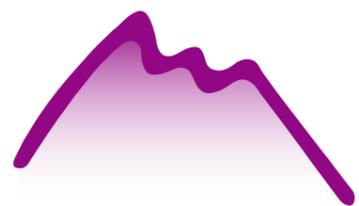
交通案内 / ●中央自動車道河口湖 I.Cより車で10分
●東富士五湖道路山中湖 I.Cより車で10分
●富士急行線富士山駅より山中湖方面バス15分、サンパークふじ下車



博物館附属施設
御師 旧外川家住宅のご案内

〒403-0005
山梨県富士吉田市上吉田3丁目14-8
TEL 0555-22-1101
観覧料 / 大人 100円(団体80円)
小中高生 50円(団体40円)
※博物館・富士山レーダードーム館のチケットで入館できます。

タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地一帯を指すこの地方のことは「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化(変化)したものとされています。



MARUBI

富士吉田市歴史民俗博物館だより

41

2013.10.31

FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY NEWS

Contents

富士山あれこれ 1
博物館Report 2-8
「発見! 上吉田村絵図」



■水田に映る逆さ富士

富士山が世界遺産に登録されました!

2013(平成25)年6月、晴れて富士山が世界遺産に登録されました。正式な名称は「富士山—信仰の対象と芸術の源泉」です。世界遺産は、世界中の人びとの宝として守り、未来へと伝えていく、とても貴重な文化財(文化遺産)や自然(自然遺産)のことで、世界遺産登録によって富士山は名実ともに日本の宝から世界の宝となったわけです。

世界遺産に登録されるには、長い道のりがありました。簡単な登録の流れを記すと、まず、日本国から世界遺産へ登録してほしいとユネスコ(国際連合教育科学文化機関)へ推薦します。ユネスコはその諮問機関であるイコモス(国際記念物遺跡会議)に世界遺産の候補になっている場所に訪れて、世界遺産登録にふさわしいか調査を実施します。調査の結果、5月に世界遺産登録にふさわしい旨の勧

告(専門的な意見)が出されました。このイコモスの勧告内容をもとにして、6月にカンボジアのプノンペンで開催されたユネスコの第37回世界遺産会議で正式に世界遺産に登録されたわけです。

世界遺産登録されるにはとても厳しいルールがあります。それは富士山を守っていくために世界遺産の評価基準にもとづいた「保存管理計画」と呼ばれる取り決めを作ります。これは富士山が持っている素晴らしい歴史や文化、自然を守り、未来へと伝えていくための方法や活用の指針を決めたものです。これに則って世界遺産としての富士山の保全管理をおこなって未来へと引き継いでいくことになります。

世界遺産は、「文化遺産」・「自然遺産」・「複合遺産」に分類されます。このなかで富士山は文化遺産として登録されました。

2013(平成25)年現在、世界には981件の世界遺産が登録されています。日本には文化遺産と自然遺産が合わせて17件が登録されており、複合遺産での登録はありません。

それでは、富士山の何が認められて世界遺産に登録されたのかという点について少しふれてみます。富士山はその山容の美しさから古来より日本一の名山として親しまれてきましたが、一方では火を噴き災害をもたらす怖ろしい山でもありました。そのため、昔から神仏の山として信仰の対象となってきた歴史があります。また、美しいその姿は、浮世絵など多くの芸術作品の題材とされてきました。このようなことが認められて世界遺産に登録されたわけです。

「世界遺産 富士山」というと、どうしても山体そのものが登録されたように考えてしまうことが多いようです。しかし、

富士山の世界遺産登録は、山そのものだけでなく、湖や神社、遺跡などが合わさって世界遺産となっています。富士山は、山梨・静岡両県にまたがり、信仰や芸術に関係のある文化財が広い範囲に散らばっています。構成資産は、全部で25件ですが、細かく分けると34件となります。つまり、富士山の歴史や文化の素晴らしさをわかってもらうには、富士山という山だけでは説明できないため、構成資産が一緒になって登録されるのです。これらの文化財や景観等を含めて、富士山全体を一体のものとして守っていくことが必要となります。

世界の宝となった富士山、これがゴールではなく、富士山を未来へと引き継いでいくために今後さまざまな取り組みや努力が必要となってきます。

(布施光敏)

発見！上吉田村絵図

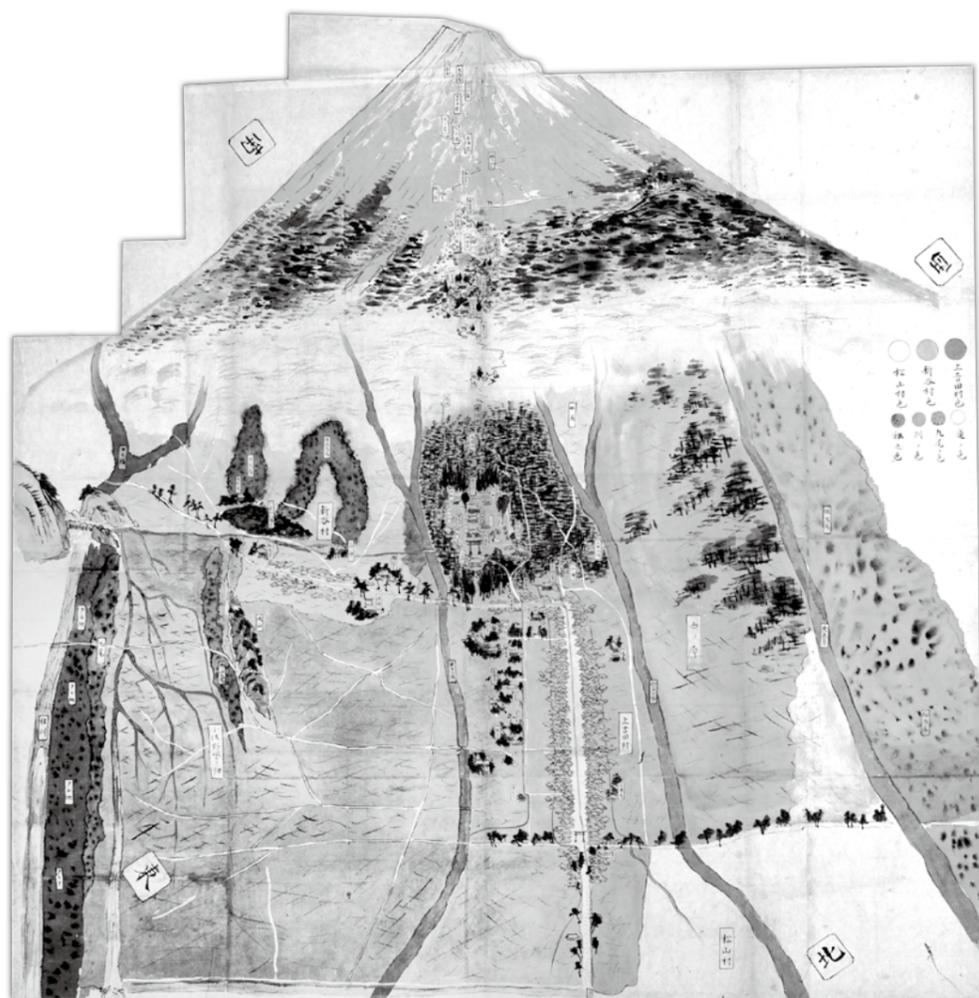
菊池邦彦(富士吉田市文化財審議会委員／東京都立航空工業高等専門学校教授)

発見！上吉田村絵図

絵図との出会い

歴史の史料は、時に思いがけない場所から発見されることがあります。富士山麓から遠く離れた甲府盆地南部の荊沢宿(南アルプス市)は、甲州三河岸のうち、富士川右岸に位置する鰍沢河岸・青柳河岸(いずれも現富士川町)で陸揚げされた荷物が、駿信往還を通る最初の宿場です。この宿場で問屋場を勤めておられた方のお宅を初めて訪れたのは、大切に保管されている古文書などを拝見させていただくためでしたが、伺ってみると、当家には通常の村方文書の他に、何代か前のご先祖が蒐集された甲斐国内(一部他国)の村絵図がまとまって残されていました。この絵図の中に、富士山を背景とする上吉田村の絵図があったのです。

上吉田村は、一つの村に数万点といわれる中世から近世・近代の古文書が残る、山梨県内でも有数の古文書の残存量が多い村です。その理由は、八十数軒とも百軒ともいわれる富士山御師のいた村であったことです。御師の家では諸国から富士参詣に訪れる道者を泊めるだけでなく、富士山信仰を中心とした諸情報を発信する宗教者、また文化人としての側面も有しており、そこに集ったさまざまな情



■上吉田村絵図/個人蔵

報を記録していました。一般の村方文書とともに、それらを記録した文書が各御師の家に蓄積されていたため、自ずと古文書の量が増えていったのです。しかし、不思議なことに、これだけたくさん古文書が残っているにもかかわらず、その中に江戸時代の上吉田村を描いた絵図が、全くといってよいほど発見されていないのです。多数の古文書の存在、それにもかかわらず、自村を描いた村絵図をはじめ、村方に関する古文書が必

ずしもまとまって残っていないこと、これも上吉田村の古文書の特徴といえるのです。

勿論、文化年間(1804-1818)に有名な『甲斐国志』が編纂される際、各村ごとの村絵図も作成され、集められたことはよく知られています。都留郡の担当者森嶋家に大切に保管されてきたそれらの村絵図の中に、上吉田村を描いた絵図がないわけはありません。しかし、その絵図の名が「浅間神社ならびに富士山絵図」(『都留市史』資料編

村絵図・村明細帳集)・「上吉田村浅間神社絵図」(本館刊『富士山登山案内図』)として世に紹介されたように、この絵図は実にあっさりとして富士山と浅間神社など上吉田村の村域を示すにとどまっており、更に詳細な絵図の出現が待たれていたのです。

このため、幾重にも折りたたまれたこの絵図を拡げて初めて拝見した時(現在は表装済)、思いがけない場所で出会ったこともあって、「あっ」と驚いたのです。

全体図

それではまず、絵図全体を眺めてみましょう。[縦113.0×横111.5センチ]、切り取られた部分がなかったとしたら、元の用紙は正方形に近い大きさであったと良いでしょう、小学校低学年の子供くらいの大きさです。上部には図全体の3分の1ほどの大きさで北口から見た

富士山が描かれ、次第にその麓に下って、残り3分の2に上吉田村の村域が描かれています。下部中央には浅間神社と上吉田村の街並みを中心に両側の雪代よけの東西のカラボリ(空堀)が縦に走り、それを取りまく道と水路と耕地が色彩豊かに広がっています。この上吉田の村

域を左右に挟むように小豆アイスの様な色彩で描かれているのが溶岩流です(地元ではマルビ〔丸尾〕と呼ばれ、本誌の題名にもなっています)。この部分は、絵の具で全体の丸尾の部分を塗った後、その絵の具が乾かないうちに、ゴツゴツしている様子を示すためでしょう

か、上から黒い絵の具を重ね塗りし、黒い部分が滲んだような効果を出しています。この技法をタラシコミというそうです。偶然なのか意図的なのかわかりませんが、もし後者なら、本図を作成したのは、プロの絵師かそれに近い人物の可能性が出てきます。

富士山

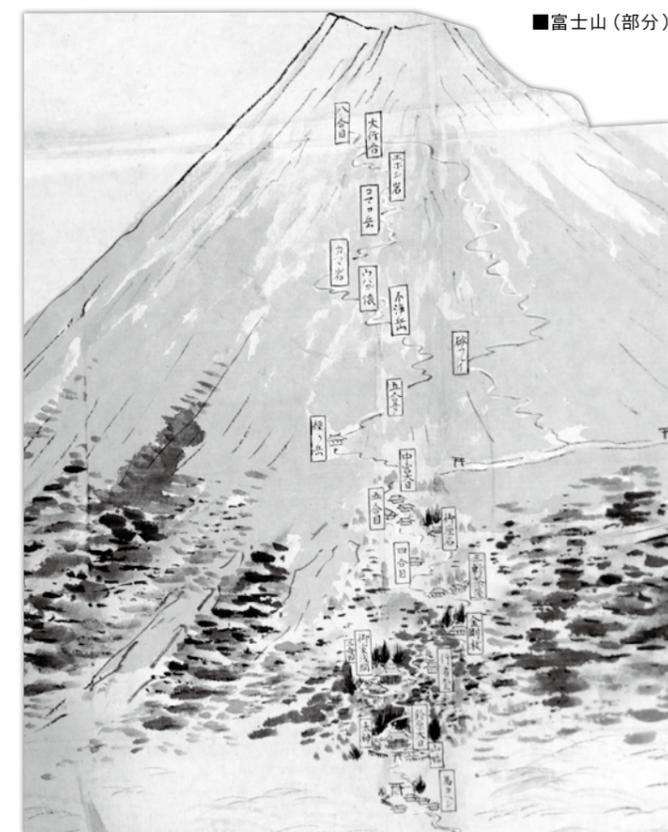
では、富士山の部分について見てみましょう。麓にはスキのような草原が白っぽい明るい色彩で描かれています。いわゆる草山三里です。次に暗緑色の絵の具が筆を置くような筆致で重ねられています。ここが樹林地帯で木山三里の部分です。そしてその上は、肌色のような色彩の岩肌が頂上まで続きます。焼山三里です。この肌色の上に乗せられている白い色彩が雪であるとすれば、積雪はまだ一部で、この絵図の季節は、先ほどのスキも考慮すると中秋くらいであろうと推定されます。

また、浅間神社から富士山に向かう道筋を、「馬カヘシ」(馬返し)から辿ってみると、鈴原大日との間に「山始」と書かれています。ここが一合目であるとの認識によるものなのでしょう。それらを順にまとめると、右記のようになります。合目の間の場合は、直近の合目に分類してみました。()と〔 〕は筆者が補ったものです。

これからもわかるように、吉田からの道と須走からの道が合流する大行合のある八合目よりも上の記載が一切ありません。注目すべきこの絵図の特徴です。八合目以上は南口の富士山

- (頂上)〔記載無し〕
- (九合目)〔記載無し〕
- 八合目
大行合
- (七合目)
カマ岩・コマカ岳・エボシ岩
- (六合目)
不浄岳・ウバガ懐(ウバガ岳)
- 五合目
中宮大日・経ヶ岳・五合五勺
- 四合目
御座石
- (三合目)
三軒茶屋
- 二合目
御室浅間・行者堂・金剛杖
- (一合目)
山始・鈴原大日・太神

本宮浅間大社の持ち物である、という認識からでしょうか。その上、この八合目から上の部分は、どうやら紙を継いで描かれているようです。先ほど、作者はプロの絵師の可能性があると推定しましたが、この点は、果たしてそうなのか、いぶかしいところです。また、この絵図のもう一つの特徴は、山頂が富士講などで知られるいわゆる三



■富士山(部分)

峰型ではないこと(なぜか山頂の西側は切り取られています)。『甲斐国志』と同時代の村絵図では、ほとんど例外なく富士山頂は三峰型に描かれており(前掲『都留市史』)、実に対照的である。なお、向って左側(東側)は方位を示す南の文字は

残っていますが、階段状に切り取られ、よく見ると一か所稜線にかかるほど深くカットされている部分もあることがわかります。その理由はわかりませんが、ここには、絵図作成の年代や村名・村役人名、絵図の題名、持ち主、あるいは絵師の名など

が書かれていた可能性もあるのではないのでしょうか。一方、五合目から現在バスが発着する小

北口本宮富士浅間神社

今度は、目を下部中央の浅間神社と、それに続く上吉田村の街並みの方に転じてみましょう。大きな杉木立の参道を入ると仁王門(残念ながら明治の廃仏毀釈で壊されました)、大鳥居と続き、随神(身)門をくぐると、護摩堂(本図では名称未記入)・神楽殿を経て、拝殿・本殿に至ります。背後の右殿(東宮)・左殿(西宮)はそれぞれ武田信玄と浅野氏重が寄進した当時の本殿で、現在国の重要文化財となっています。背後の石垣も現在と同じです。しかし、鐘楼と手水石は名称のみで、場所も一考が必要です。一方、向って右手には諏訪明神が描かれて

上吉田村の領域

この絵図の右側には、二段にわたって図中の色の説明があります。上段には「(白)松山村色・(黄)新谷村色・(緑)上吉田村色」の3か村の名があげられていますが、松山村の村域は白く塗られ、この絵図が作成途中でない限り、松山村は隣村として村名と境が紹介されているだけです。これに対し、浅間神社手前の鎌倉街道に発達した街村である新谷村(通常は新屋村と表記)は、家並みをはじめ村はずれの題目堂きざなみ神社、反対側の観音堂、山神社・小倉山八幡宮、その向うの大六天社までもれなく記されています。新谷村は、その名称からもわかるように、新しい村という意味で、成沢(鳴沢)村の者がこま植取

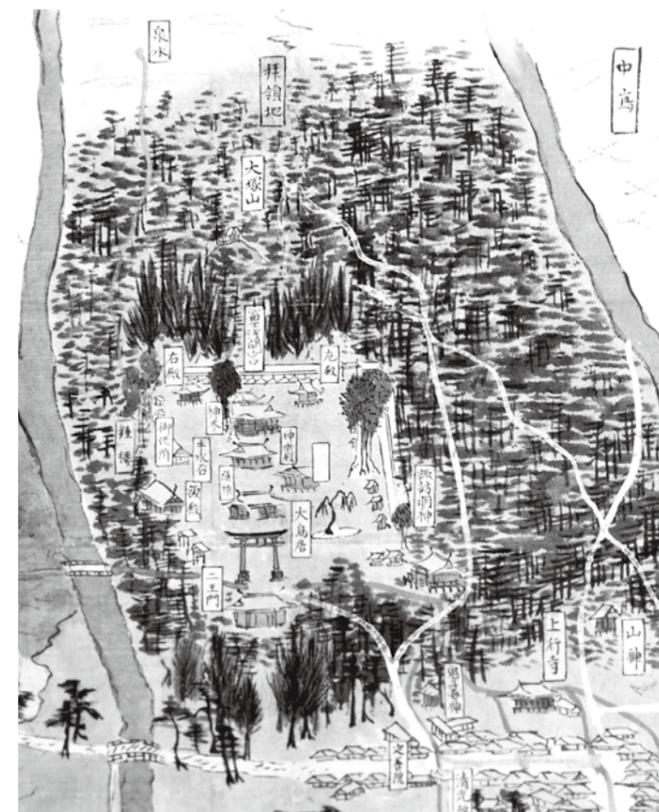
御嶽方面を見ると、山腹を横切る道が鳥居とともに描かれています。いわゆる横吹(横走り)の

います。現在でもこの神社の社を諏訪森[すわのもり](日本武尊の小祠のある大塚山を含む図中の拝領地がこれに当たるのでしよう)といいますが、「吉田の火祭」でも(諏訪)明神の御輿を富士山御輿が追い抜いてはならないと伝えるように、本来この森は諏訪神社の神域で、地主神が少し遠慮勝ちに扱われているのです。しかし、火祭のクライマックスの舞台である「高天原」の場所には、枝の垂れた神木が描かれています。現在でも、この周りを御輿と大勢の人々が駆け巡るのです。神社の上部には、泉水と遊興の場所がしっかり記されています。

りに来て定住に至ったという伝承があります。「慶長古高帳」には「一三拾石 新屋村」と出ており、寛文9年(1669)の検地帳には41の屋敷がありますので、近世初頭には一村をなしていたことは確かですが、周辺よりは新しくできた村である、と認識されていたようです。新谷村の村域は、浅間神社の西の飛び地「中馬」も含めて目立つ黄色で表現され、上記のように大変丁寧に描かれています。それは何のためでしょうか。本絵図が、新谷村と上吉田村との間の何らかのトラブル解決のため作成された可能性もないわけではありませぬ。しかし、それよりはむしろ、新谷村が上吉田村と富士山との間に所在する唯一の

道です。『富士山真景之図』にも、この道の鳥居が描かれています。ただし、小御嶽は浅間神社ほど

詳細ではなく、建物が林間に見え隠れしている程度です。



■北口本宮浅間神社(部分)

村であるので、上吉田村の領域を明確にするために、新谷村についても詳細に描く必要があったのではないのでしょうか。つまり、富士山八合目から下(北側)の部分とそれに続く浅間神社以下の部分、この上吉田村の領域を明確に示すこと、これが本絵図の作成目的と考えられそうです。絵図中央下部に描かれる金鳥居の下には閻魔堂えんまが描かれていますが、この傍には道者改役所があり、ここで諸国からやってくる道者を改めていました。現在、この十字路の角には元文

5年(1740)の庚申縁年に建てられた道標を兼ねる庚申供養塔[左ハ甲州ミち 右ハ江戸ミち]が、ひっそりと建っています。ここから下は、現在の中曽根地区(上吉田分)ですが、ここにも家並みが続いています。しかし、下吉田村については、境を示す大溝とそこを跨ぐ2枚の大きな石橋が掛けられているのが描かれるのみで、名称も書かれず、一切言及はありません。

発見! 上吉田村絵図

上吉田の街

それでは、いよいよ上吉田のマチについてみましょう。上吉田村は、全国的にも稀有なその成立年代が記録されている村です。もとは小佐野(この絵図の向かって左端の「小佐野水カケ畑」のあたり)にあり、次いで古吉田(現在の吉田小学校のあたり、この図の小佐野と吉田の街との中ごろ)に移りましたが、雪代(富士山の雪解け水による土石流)の被害を避けるため、元亀3年(1572)に一村をあげて現在地に移ったのです。この時形成されたのが、上町と中町で、この絵図の西念寺(街の上部左手)から、その下の案松寺と右手にある善導寺を結ぶ線までです。これより下は金鳥居まで町の幅が少しくびれていますが、この部分が下町で、慶長11年(1606)に新たに加えられ、上吉田村の街並みの南北の範囲はここに確定したのです。この他、上町から左に折れて浅間神社方面に続く横町の存在は、元和6年(1620)の庚申縁年の史料には記されていますので、現在の上吉田の街の原型は早くも江戸時代初めには形成されていたものと考えられます。

上吉田の寺社

300軒以上の人々が暮らす上吉田村には、多くの寺社が存在し、人々の帰依を受けていました。ここでは、先ほど紹介した浅間神社以外に、この絵図に描かれている寺社についてごく簡単に紹介します。

【横町】まず、浅間神社前から右方向、釣の手に曲がる上町に至る横町の南側には、上行寺〔当時は日蓮宗光長寺末、『勝山

上吉田村は、延享3年(1746)の村明細帳によると家数346軒・人数1447人の大村ですが、江戸時代にはあくまでも「村」で、公式の史料には上吉田村と出てきます。しかし、村方の文書には、時に上町とか中宿など、村の中を町や宿と表現しており、火祭が行われることを触れる役を「町触まちおれ」などと呼んでいます。町・宿・駅などというのが、当時の上吉田村のイメージだったのです。駿河湾と甲府を結ぶ漁獲物などの流通ルートの中継地として、また、富士山北口の登拝拠点〔信仰登山口集落〕として、多くの人々と情報・物流の集散地でした。この村に、『甲斐国志』のころ(文化年間、1804-18)に86軒といわれる御師がいたのです。

ところで、この上吉田の絵図には、いったいどのくらいの屋敷が描かれているのでしょうか。ざっと数えても片側100軒以上、東西と横町・中曽根などを合わせると300軒近くはあります。しかも、屋敷の形や大小、入口の向きも一定ではありません。これは当時の街並を忠実に写したのかとも思わせませ

が、やはり絵師が屋敷のいくつかのパターンを用意し、それを組み合わせて家が密集する当時



■上吉田(部分)

発見! 上吉田村絵図

の上吉田村の様子を表現したものでしょう。皆さんはどのようにお考えでしょうか。

記」明応8年(1499)条には「吉田上行寺上へ引ル、」とあり、街の移転以前にこの地に来ていたと思われる)と鬼子母神・山神・天照大神が描かれています。道の反対側の西念寺は山梨県内でも数少ない時宗の寺です。境内には塔頭の定善院・清光院・観音院と鐘堂が描かれています。これ以外の寺社は、配置順に

きりと確認できたことでした。今後、その解明が期待されます。【東側】元亀3年の移転の際に都市計画があったとすれば、東側に寺社を並べる意図があったものとも思われます。多くの寺社が配列されていた。吉祥寺〔臨濟宗月江寺末、文明18年(1486)開基〕・向富庵〔杜のみ*〕・根神〔宮主佐藤上総(大玉屋)、元亀3年の移転



に先立ち、元年に現在地に創建されたと伝える〕・**是徳庵**〔社のみ〕・**地藏寺**〔臨濟宗月江寺末、天正5年(1577)開基〕・**見方庵**〔見峯庵、臨濟宗月江寺

川・道・堀・丸尾

先に述べたように、この絵図の作成目的が上吉田村の領域を示すものであったとすると、それではいったい、村内の何が描かれているのでしょうか。富士山については、山中の地名とそれに対応した諸権利の確認を考えてよいでしょう。また、浅間神社も大切な施設として詳細にその建物の配置が描かれ、街村としての上吉田村の街並みも、寺社の位置とともに生き生きと描かれています。それとともに、先に見た色彩の説明の下段には、「(灰色と黒い点)堀之色・(水色)川ノ色・(小豆色と黒い点)丸尾ノ色・(白)道ノ色」と色ごとの地形が説明されていますので、上記以外、この絵図の作成目的は村内の道・川・堀・丸尾という4つの要素を示すことであった、といえるでしょう。まず道ですが、東の梨ヶ原から新谷村を経て北口本宮富士浅間神社の前まで来た道は、横町で90度曲がって東西に御師の家が連なる上吉田の街に入ります。この街並みを上町・中町・下町と下って金鳥居で再度直

絵図の年代①

さて、このように本図は上吉田村の領域を全体的に把握する上で大変興味深い絵図ですが、残念ながら年号や干支などは記載されていません。いったい、いつごろ作成されたのでしょうか。この絵図の中には、多く

末、杜のみ〕・**山神**〔元禄12年(1699)創建〕・**案松寺**〔安祥寺、杜のみ〕。

【西側】上町の祥春庵〔臨濟宗月江寺末〕と下町の善導寺

角に右に曲がり、松山村境を西に向かうと川口村(富士河口湖町)方面に続きます。この道が鎌倉往還(国道137・138号)です。これに対し、北の下吉田村から上って金鳥居に至るのが江戸道(富士道)とも呼ばれる富士参詣の道です。江戸と鎌倉という武家政権の中核と上吉田の街が繋がっているという人々の意識、そのことが伺われて大変興味深いことです。これ以外の道も、忍草村から桂川を越えてくる道をはじめ縦横に描きこまれています。この絵図の作者が野道なども含めて意識的に描きこんだものと思われ、この時代の当地域の人々の通路を復元する絶好の史料といえましょう。

次に川です。一般に富士山麓では高所の集落ほど用水や飲み水の確保に苦慮する傾向にあり、耕地はほとんど畑作です。標高780～900メートルに所在する上吉田村もこの例外ではありません。まず、浅間神社の南の富士山側には、富士山の内八海にも数えられることのある泉

の寺社名や地形名称が書き込まれていますが、筆者には、それらを手掛かりに年代を推定することができませんでした。

そのかわり、現時点でこの絵図の年代を考える二つの視点を指摘しておきたいと思います。

〔浄土宗長安寺末〕の2か寺のみです。祥春庵は寺庵ですが浅間山の山号があり、下吉田の月江寺開基のもととなった古い由緒があります。現在は地元の方

水があって、神社境内まで流れ下っています。一方、山中湖から流出する桂川は、絵図向かって左の鐘山の滝で南から北に流れ下っていますが、その一部は大堰で取り入れられ、樹の枝分かれのように分水されて小佐野の水かけ麦を潤す用水となっています(「小佐野水カケ畑」と表記)。一方、用水の一部はそのまま西流し(福地用水路)、浅間神社の手前で東のカラ堀を樋で渡って浅間神社の御手洗川となり、その先は、四つに分かれています。それらは上吉田村の表通りと東西の屋敷を貫流して各御師屋敷に襖の場を提供し、その後松山村や下吉田村に流下しています。また、残りの一つは西念寺の境内から北に向かって流下し、寺社に用水を提供して、東カラ堀に合流しています。

カラ堀は雪代を流して、融雪による土石流被害から村を守るための重要な施設で、上吉田の街並みと浅間神社を東西に挟み込んで守っている様子が、絵図からよく読み取ることができま

まず第一は、先にあげた『甲斐国志』編纂(文化年間、1804-18)の際に提出されたと思われる上吉田の絵図に注目したいと思います。この絵図は、前述のように『都留市史』では村絵図としては扱われていません。「浅間

発見! 上吉田村絵図

が祥春庵を「ヒョウシンナ」と呼ぶ墓域となっています。善導寺は眼病にご利益があるとされる瞳観音でも有名です。

地の古吉田から現在地に移転した大きな理由もこの雪代災害を防げなかったためとされます。

最後に丸尾ですが、これは溶岩の流れが冷えて固まったもので、富士山麓の人々はこの地形と共存しつつ、それを克服することで生活の範囲を広げてきました。この絵図に描かれている新谷村の南に所在する雁穴丸尾は、そこに形成された「雁ノ穴」により命名された古墳時代ころの溶岩流です。雁ノ穴は2基の溶岩洞窟と16基の溶岩樹型で構成されていることが分かっていますが、当時はお胎内信仰と結びつけて考えられていたようです。万延元年(1860)には、上吉田村の地藏寺(前掲、上吉田の寺社参照)がその借用を申し出て、庚申縁年の参詣人を集め、その収入の半分を入会11か村に分配することを約束しています。また、上吉田村の西側には巨大な剣丸尾があり、これに沿うように大ホリの溝が松山村まで続いているのが目を引きます。

で紹介してきました。筆者は写真版のみで、この絵図を実見していませんので推定の域を出ないのですが、同じ絵図でありながら引用者によって絵図の題名が異なるということは、絵図自体に題名の記載がなく、引用者の命名によるものであるように思われます。このため、この絵図に対する先入観をいったん断って双方を比べてみると、富士山が三峯である点は異なりますが、両者は大変似通った構図であることに気が付きます。富士山を上部に配し、各合目や地名が描かれ、その上限が八合目の大行合であることも一致しています。一方、山麓に向かって下ってくると、遊興〔『都留市史』では□□と2字空欄になっていますが、写真版で見るとこのように読めます〕や泉水、さらに下って大塚と浅間神社境内、横町から釣の手に曲がった「吉田」の街、金鳥居を下ると「江戸道」(荊沢の間屋場所蔵の絵図〔以下、間屋場本と表記します〕にこの名称は書かれていません)の松林が続き、松山村の名前も書かれています。東西の空堀や溶岩流(丸尾)の配置も同様です。また、目を向かって左〔東〕に転ずると、城

絵図の年代②

第二の視点は、絵図の中に描かれた金鳥居のことです。これまでの研究で、上吉田の街の入口に建てられている金鳥居は、天明8年(1788)に御師中雁丸家を中心に再建(創建との説もあります)されたものの、寛政12年(1800)、庚申縁年を迎える年の3月に大風で倒壊。その後、同家から何度か再建願が出されますが、実際再建が成就するの

山や城山丸尾、鐘山の滝から流れ下る桂川の流水や、大堰から取り入れられた用水が小佐野で多くの支流に分けられ、水かけ麦を潤しています。図の大きさは〔82.0×82.0 cm〕と、間屋場本の四分の三ほどの大きさですが、同じ正方形です。

つまり、筆者の見るところ、この2つの絵図の基本的な構図はほぼ一致しているのです。間屋場本の絵図が街並みや寺社をより詳しく描きこんでいるのに対し、森嶋家のもの方がより簡便に描かれているように思われます。ただし、後者は大塚から浅間神社までの距離がかなり誇張され、しかも濃い絵の具が使用されているため、諏訪の森が絵図の中心をなしているように見えます。浅間神社の絵図とこのように読めます)と泉水、さらに下って大塚と浅間神社境内、横町から釣の手に曲がった「吉田」の街、金鳥居を下ると「江戸道」(荊沢の間屋場所蔵の絵図〔以下、間屋場本と表記します〕にこの名称は書かれていません)の松林が続き、松山村の名前も書かれています。東西の空堀や溶岩流(丸尾)の配置も同様です。また、目を向かって左〔東〕に転ずると、城



■上吉田村浅間神社絵図／都留市蔵

の絵図は、『甲斐国志』のために村ごとに作成され提出された絵図のうち、上吉田村のものではないでしょうか。他の村絵図とは若干趣が異なりますが、富士山や浅間神社の存在が強調されているにしても、上吉田の街や道・水路も描かれており、村絵図といっても遜色ないと考えられます。

それでは、この二つの絵図作成の時間的前後関係をどのように考えたら良いでしょうか。

一つの考えは、まず簡便な絵図(森嶋家本)が作成され、そ

の後同じ構図ながら、その中の上吉田村と新谷村の街並みを中心に、より細かく精緻に屋敷や寺社の並ぶさま、浅間神社境内などを描きこんだのが、間屋場本の絵図ではないか、というものです。勿論、詳しい絵図から簡便な絵図に書き改められる可能性もなしとはしません。しかし、この2枚の村絵図を比べて見る限りは、簡便な絵図の構図をほぼそのままに、寺社や屋敷の可視化を行った、このように筆者には考えられるのです。

は天保2年(1831)のことです。以後、明治10年(1877)に再び倒れるまで、この金鳥居は上吉田の街の入口で、富士山を登拝する人々を迎え続けたのです(高橋君子「金鳥居 倒壊と再建の歴史(前)」『MARUBI 29』2007所収)。絵図に描かれたものがすべて現実そのままであるか否か、という点を捨象すれば、金鳥居が描かれていることか

ら、2枚の絵図は天明8年から寛政12年の13年間か、あるいは天保2年から明治10年までの47年間〔名称などからは、明治までは下らない近世の範囲の絵図と考えられます〕のいずれかの期間に作成されたものである、ということになります。

しかし、それでは、森嶋家本の絵図が『甲斐国志』編纂段階のもの(文化年間、1804-18)で

あれば、鳥居はまだ再建されておらず、想像によって描かれたもの、ということになります。これに対し、絵図を信頼するならば、鳥居の再建は文化年間には成就していたこととなり、それを裏付ける史料を見つけなければなりません。筆者の考えでは、今のところ高橋説は既知の史料を矛盾無く説明しており、森嶋家の絵図に描か